



TITLE:

戸帖考

AUTHOR(S):

會我部, 靜雄

CITATION:

會我部, 靜雄. 戸帖考. 東洋史研究 1948, 10(3): 155-163

ISSUE DATE:

1948-07-15

URL:

<https://doi.org/10.14989/138890>

RIGHT:

戸帖考

曾我部靜雄

戸帖なる語は、唐宋以後の諸文献に、まゝ現はれてゐるが、この小篇では、それが變遷を見んと思ふ。

戸帖なる語が一番古く見える文献は、私の調べた所では、南齊書卷十四、州郡志上、南兖州の條にある南齊の武帝永明元年（西紀四八三）になされたる柳世隆の上奏文であらう。

尙書符下土斷條格、并省僑郡縣、凡諸流寓、本無定讞、十家五落、各自星處、一縣之民、散在州境、西至淮畔、東屆海隅、今專罷僑邦、不省荒邑、雜居舛止、與先不異、離爲區斷、無革游濫、謂應同省、隨堺并帖、若鄉屯黑聚、二三百家、井甸可脩、區域易分者、別詳立、於是、濟陰郡六縣、下邳郡四縣、淮陽郡三縣、東莞郡四縣、以散居無實土、官長無廨舍、寄止民村、及州治立見、省民戸帖、

この上奏は、全齊文卷十七にも奏省流寓民戸帖と題して載せられてゐる。

この上奏は、有名無實の流寓の郡縣を改廢し、その流寓民の戸帖を省かんことを要望したのであつて、それが容れられて、戸帖が省かれたが、この場合の戸帖は、どうしても戸籍と同一意味のものと思はれない。降つて唐代になると、唐會要卷八十四、租稅下、舊唐書卷四十八、食貨志上、及び冊府元龜卷四百八十八、邦計部、文宗太和四年（西紀八三〇年）五月の條に、

劍南西川宣撫使諫議大夫崔我奏、准詔旨、制置西川事條、今與郭釗商量、兩稅錢數內三分、二分納見錢、一分折納匹段、每二貫加饒百姓五百文、計一十三萬四千二百四十三貫文、（中略）舊有稅蓋芋

之類、每畝至七八百、徵斂不時、今併省稅名、盡依諸處爲四限等第、先給戶帖、一切名目勒停、勅旨宜依、(唐會要による)とある。

この場合の戸帖は、納税に關するものであつて、これを支給して横賦を無くせんとするのであるから、各戸の稅額を記入してある納稅査定書であらう。宋ではかかる通知書を戸鈔と稱し、稅を納入し終れば、直ちに朱印してその證とするのであつて、委細は拙著宋代財政史の財政篇に論じて置いたが、この宋の戸鈔と唐の戸帖とは全く同一のものであらう。然るに宋代になると戸帖は、戸籍とか戸鈔の外に造られた。續資治通鑑長篇卷四、太祖乾德元年(西紀九六三年)十月庚辰の條には、

詔、諸州版簿・戸帖・戸鈔、委本州判官錄事掌之、舊無者、創造、始令諸州歲所奏戸帳、其丁口、男夫二十爲丁、六十爲老、女口不須通勘、

とあつて、戸帖が版簿・戸鈔・戸帳の外に存在してゐる。版簿は宋の戸籍のことであつて、宋では丁男のみ

の戸籍を造り、而も資産によつて五等級(客戸を入れは六等級)に分けたから、これを五等丁產簿とか單に丁產簿と稱し、戸帳は唐代の計帳のことであつて、班田收授法廢止後は、唐でも計帳とも言ひ戸帳とも稱し、各州郡から中央に一ケ年の戸口數等を報ずる帳簿であつた。これ等については近く發刊する筈の拙著均田法とその稅役制度に述べてある。戸鈔は既に述べた如く、各戸の稅額を記入してあるもので、各戸がこれを保存し、納稅に當つては、この額のみを納れ、以て不當なる課稅を防ぐためのものであつた。版簿即ち戸籍、戸鈔、戸帳は以上の如き使命を持つてゐるが、戸帖は如何なる使命を宋では持つてゐたのであらうか。續資治通鑑長編のこの史料には、何の説明もなきこととて、一切は不明であるからして、他の史料を検討しよう。先づ宋會要稿食貨六三、農田雜錄仁宗天聖四年(西紀一〇二六年)六月、辛惟慶の上言に、

臣與福州體量閩候官十二縣、共管官莊一百四、熟田千三百七十五頃八十四畝、佃戶二萬二千三百人、於太平興國五年、准敕、差朝臣、均定二稅、給帖

收執、内七縣田中下相半、五縣田色低下、尋牒州估價、及具單貧人數、按見耕種熟田千三百七十五頃、共估錢三十五萬貫、已牒福州出賣、送納見錢、或金銀依價折納、(中略)已牒福州、並須全業收買、依敕限三年納錢、(下略)

とあつてこの上奏を理財の官である三司に下して詳議せしめた所、三司の言ふには、

若依惟慶佇定價錢三十五萬餘貫、今作三年送納、恐見佃戶除二稅外、更納田價錢數多、欲乞特與減放、(中略)候納錢足、給戶帖與買田人、執爲永業、

應副差徭、(下略)

とあり。これは福州管下の官莊田を佃戶即ち小作人に賣渡すについての方法を論じたのであるが、給帖收執とか、給戶帖與買田人、執爲永業などあつて、この戶帖は土地所有の證明書である地券に外ならない。又同書同卷徽宗宣和元年(西紀一一一九年)八月二十四日、農田所の奏には、

應浙西州縣、因今來積水減退露出田土、(中略)出榜、限一百日、召人實封投狀、添租請佃、限滿折

封、給租多之人、每戶給戶帖一紙、開具所佃色・步畝・四至・著望・應納租課、(下略)

とあつて、この戶帖も佃戶に與へた小作認可契約の地券であつて、面積小作料等を記入されてゐた。

宋會要稿に現はれてゐる戶帖は以上の如く地券であるが、王安石の新法の一つである方田に現はれてゐる戶帖も亦、地券の如きものであつた。宋史食貨志方田及び宋の楊仲良の通鑑長編紀事本末卷七十三、方田には

方田之法、以東西南北各千步、當四十一頃六十六畝一百六十步爲一方、歲以九月、縣委令佐、分地計量、據其方莊帳籍、驗地土色號、別其陂原・平澤・赤淤・黑墻之類、凡幾色方量畢、記其肥瘠、定其色號、分爲五等、以地之等均定稅數、至明年三月畢、揭以示民、仍再期一季以盡其詞、乃書戶帖、連莊帳、付之以爲地符、

とあつて、地味・面積・等級・稅額等を調べ、戶帖に記入し莊帳に連ねて、各戶に與へて地符となすと言ひ、地符即ち地券と言つてゐる。しかしこの場合、莊、

帳は地に重を置き、戸帖は税に重きを置かれてゐたものであらう。何故ならば宋史食貨志方田の別の所に、蔡京らの言として、

神宗講究方田利害、作法而推行、方爲之帳。而步畝

高下丈尺不可隱、戶給之帖。而升合尺寸無所遺、

とあつて、莊帳によつて步畝高下丈尺が判り、戸帖によつて租税の升合尺寸が判ると述べてゐる。尙ほ徽宗の政和頃に出来た李元弼の作邑自箴卷四にも、

依和預買紬絹錢、多是詭名冒請、以此出限不納、

有費行遣、但於初俵錢時、加意關防、前期五七日、

告示耆戶長、各正身至日出頭、逐一識認請人是與

不是、戸頭仍齋戸帖表照、如無戸帖、要去年納鈔

呈驗、

とあつて、和買絹錢を貸與する際に、他人の名を偽つて借りるものがあるから、それを防ぐために、本人である證據として戸帖を持參して、照合に供したのである。和買絹錢については、拙著宋代財政史中に詳論して置いたが、これは農民の春季手許不如意の折に、政府より錢を貸し、蠶繭の出来上つた後、絹紬を以て償

還する制度であつて、太宗頃から行はれた。勿論農民にして土地があり、養蠶を行つてゐなければ、貸與されないであつて、この證據として戸帖が役立てられたのであらうが、この戸帖も地券の如きものと認めても差支へなからう。

南宋時代になつても矢張り戸帖の制度が行はれ、而も南宋初期には、財政難のために、度牒官告などと同様に賣するやうになつた。南宋の初めは、金軍の南下によつて國內は全く混亂し、民衆の流離徙移するものが多かつたから、戸帖を支給して、所有地の安堵を得しめる必要があつた。宋會要稿食貨六九、版籍に、

高宗紹興二年閏四月三日、右朝奉郎姚浚言、欲乞

朝廷行下諸路轉運司、曾被燒劫去處失契書業（契書物業？）人、許經所屬州縣陳狀、本縣行下本保

隣人、依實供證、即出戸帖付之、以爲永遠照驗、

如本保隣人作情弊、故意邀阻、不爲依實勘會、及

本縣人吏不即時給戸帖、並許人越訴、其合于人、

重寘典憲、

とあるは、この必要を姚浚が力説したのである。かく

て戸帖を要求者に與へるやうになつたのであらうが、當時は南宋の初めであり、極度の財政難に陥つてゐた折とて、ここに戸帖を全國の悉くの戸に對して更めて支給し、その手數料をとつて以て國家の財源特に軍費の支出に當ることになつた。李心傳の建炎以來繫年要錄卷九十五、紹興五年（西紀一二三五年）十一月の條には、

詔諸路州縣、出賣戸帖、令民間自行開具所管地宅、畝間架之數、而輸其直、仍立式行下、時諸路大軍多移屯江北、朝廷以調度不繼、故有是請焉、

とあるは、紹興五年十一月の詔によつて實施するに至つたのを傳へてゐるのである。而も同條にはその次に、

已而中書言、恐騷擾、稽緩、乃立定價錢、應坊郭鄉村出等戸、皆三十千、鄉村五等、坊郭九等戸、皆一千、凡六等、惟閩廣下戸、則差減焉、期一季足計、綱赴行在、即早傷及四分已上、權住聽旨、其錢令都督府樞管、非被旨、毋得擅用、

とあつて、戸帖の價を定め、その收益金の管理方法を述べてゐる。當時は都市は九等級、鄉村は五等級に、

戸の等級が分れてゐたが、更に又特等の戸もあつて、この特等の戸の戸帖が三十千即三十緡なるを始めとして六等級に分れ、最下の戸である鄉村の第五等戸、坊郭の第九等戸の戸帖は、各一緡であつた。

かかる政令が突如として發布され、しかも金錢の徵收が伴ふたものであるから、民衆は驚かざるを得ない。同條には更に次に、

時州縣追呼頗擾、乃命通判職官、徧詣諸邑、當面給付民戸、其兩浙下戸、展限一年、內諸路簿籍不存者、許先次送納價錢、俟將來造簿畢日給帖焉、と述べてゐる。

紹興六年正月辛未には、貧民に對しては、戸帖錢の半額を減ずることとなり、三月壬辰には、四川の災傷ありし州縣の戸帖錢の半分を免じ、五月壬午には、吳玠に四川戸帖錢十萬緡を賜ふて軍を犒ひしことなどが宋史高宗本紀に見えてゐるが、戸帖錢徵收によつて民衆を苦しめるを攻撃せる人々もあつて、紹興六年三月己巳には、南宋の主戰論者李綱は、官告・度牒・戸帖を出賣するを以て、失地恢復の措置としては、良策と

一はなしがたしと言ひ(建炎以來繫年要錄卷九十九)、同年四月には、言者は折帛・預借・戸帖などは、多く現金を徴収するを以て、現金の缺乏を齎したと言つてゐる。(同上書卷一百)、五月からは戸帖錢官告錢等は、悉く都督府の稽管する所となり、擧げて軍事費となつた(同上書卷一百一)。

南宋に於ける戸帖の出賣は、紹興五年に一回行はれただけで、以後は行はれなかつたらしく、文献には見えてゐない。軍費捻出の非常手段として臨時に行つたものであらう。尙ほ戸帖制度に關してその他のことが二三宋會要稿に見えてゐる。即ち同書食貨六十九、版籍には、

(a)紹興十六年六月十日、權知郴州黃武言、人戸典賣推稅、詔令戸部立法、戸部今修下條、諸典賣田宅、應推收稅租、鄉書手於人戸契書戸帖及稅租簿內、並親書推收稅租數目、并鄉書手姓名、稅租簿以朱書、令佐書押、

(b)又諸典賣田宅、應推收稅租、鄉書手不於人戸契書戸帖及稅租簿內、親書推收稅租數目姓名、書押

令佐者、杖一百、許人告、

(c)又諸色人告諸典賣田宅、應推收稅租、鄉書手不於人戸契書戸帖及稅租簿內、親書推收稅租數目姓名、書押令佐者、賞錢一十貫、從之、

とあり。(a)は田土を典賣した場合、その租稅の賦課も亦、從つて甲から乙に移るが、それを各郷の役員である鄉書手は、契書、戸帖、稅租簿に記入すべきを規定したものであり、(b)は鄉書手がそれを怠つた場合の刑罰の規定であり、(c)はその告發者に對する褒賞の規定である。宋の戸帖は地券であるが、租額も初めから記入されてゐたやうであつて、この制度でも、明にそれが現はれてゐる。又同書同卷逃移には、

紹興五年七月十五日、諸路軍事都督行府言、勘會潭鼎岳澧州荊南府公安軍、昨緣水寨作過(造?)、

沿湖居民、拋棄田土甚多、今來漸已歸業、(中略)

其元地若已被人請佃開耕了、當即依隣近見田地畝內、許對數指射、標撥分明、給戸帖文據、(下略)とあつて、これ亦、土地所有の證據として戸帖が與へられたのである。

以上の如く、宋の戸帖は、それに税額まで記入されてゐても、土地所有確認の地券に外ならぬものであつた。

元の時に、戸帖があつたか否かは、私の管見では不明であるが、明になつてからは、國初からこの制度は設けられてゐた。明史卷二百八十一、循吏傳に見える陳灌の傳には、

陳灌除寧國知府、時天下初定、(中略)灌訪問疾苦、禁豪右兼并創戶帖以便稽民、帝取爲式、頒行天下、

とあつて、明初に、寧國の知府たりし陳灌が、その府内に初めて實施し、太祖がその制度を採用して天下に及したとあり。しかしその年月は不明であるが、皇明實錄卷五十八、太祖洪武三年十一月辛亥の條には、

覈民數、給以戶帖、先是、上諭中書省臣曰、民國之本、古者、司民歲終獻民數于王、王拜受而藏之天府、是民數有國之重事也、今天下已定而民數未覈實、其命戶部籍天下戶口、每戶給以戶帖、於是戶部製戶籍戶帖、各書其戶之鄉貫丁口名歲、合籍

與帖、以字號編爲勘合、識以部印、籍藏于部、帖給之民、仍令有司歲計其戶口登耗、類爲籍冊以進、著爲令、

と言ひ、明史食貨志戶口、明會要卷五十戶口などにも同様なことを傳へてゐる。これによつて判るのは、洪武三年(西紀一三七〇年)に、初めて戶籍と共に戶帖が作られ、それには本籍地、丁口の姓名生年が記せられてあつて、戶籍はこれを戶部に藏し、戶帖は各戸に與へられたものである。ここに於いて戶帖は全く各戸が有する戶籍謄本、門牌の類に變つてゐる。

明では是の如く、戶帖は戶籍謄本、門牌の類になつてゐるが、清朝からは、これを門牌と稱した。門牌については臨時臺灣舊慣調查會編、清國行政法第二卷、戶籍門牌の項に詳論されてゐる。今これを參考にして述べんに、嘉慶會典卷十一には、

凡編保甲、戶給以門牌、書其家長之名、與其丁男之數、而歲更之、

とあるのや、戶部則例卷三には、
(上略)每戶田該管地方官、歲給門牌、書家長姓名

生業、附註男子名數、不及、出註所往、入稽所來、
(下略) 婦女

とあり。全く明の戸帖と同一の制度である。しかし後

世になると記載内容が複雑になつて、二等親から婢僕に至るまで記載するのであつた。福惠全書卷二十一、保甲部にある煙戸門牌を一例として左に掲げよう。

| 煙 戸 門 牌 | | | |
|--|---|--|--|
| 某年某月 保長 保正 甲長 鎮長 村長 空墳 隣佑 | 某 正堂某 爲申嚴保甲以固地方事案奉 督撫部院司道府廳各憲檄行前事合行給發門牌遵照 憲頒條約開列各戶姓名籍貫年齒生理丁口凡在同戶親疎屬戚男女大小不得遺漏一人以及 同居之人俱照本戶式開列違者甲長保正等併究其本戶內人敢有忤逆不孝不悌賭博酗酒生 事鬧毆挑唆詞訟依附邪教拜把遊蕩結交匪類窩賴私竊藏匿逃盜作反爲非許本戶稟首其隣 佑甲長保正等逐日挨戶嚴查如有前項事犯則行密報立拿究治如通同容隱事發一體連坐不 貸須至牌者 | | |
| | 一戸某人某處人年若干歲某生理 妻某氏 妾某氏 | | |
| | 祖父 年若干歲 祖母 某氏 年若干歲 伯父 姪 婦 | | |
| | 父 母 叔 母 孫 婦 | | |
| 兄 嫂 女 婿 姪 婿 孫 婿 | | | |
| 弟 婦 婢 僱 工 | | | |

裏面には煙戸條約を記してあるが、省略する。この各 にかかげる十家全體の門牌即ち十家牌があつた。
戸の門牌の外に、十家を以て一甲とし、その甲長の家

裏面には甲長條約を記してあるが、省略する。
 南北朝頃に、戸籍として現はれた戸帖は、唐になつては納税額記載簿の如きものとなり、宋になつては地

券となり、明になつては戸籍謄本となり、遂に清に至つて、各家の門に懸ける名札となり終つたのである。

(昭和二十二年十二月四日稿了)

| 甲 長 十 家 門 牌 | | | |
|----------------|--|----------------------|----------------|
| 某年某月 | 一戸本甲十家長某人照烟戸開 | | |
| | 一戸某人生理 一戸某人 一戸某人 一戸某人 一戸某人 一戸某人 一戸某人 一戸某人 | 本戸 男丁若干名 婦女若干名 | 幼男若干名 幼女若干名 |
| | 前示同烟戸門牌本甲某 寺住持某人僧 共若干名 某觀 某人道 共若干名 某庵 其人尼姑 共若干名 本甲如有鄉紳衿藍等開 寫十家之後庵觀僧道之 前 | | |
| 日給付某村某保某甲甲長人懸掛 | | | |